

# 酒々井町郷土研究会々報

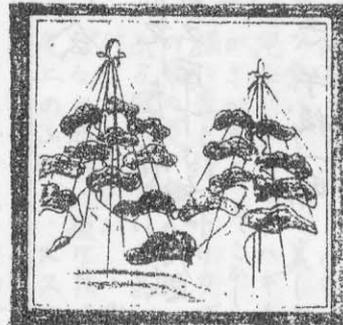
第5号  
行郷土  
酒々井町郷土  
研究会総務部

### 新年度にあたって

会長 相京 晴次

昭和五十二年の一月に、酒々井町郷土研究会が誕生して、満一年となりました。創立以来、会員の皆さんの協力により、予想以上の成果をあげることが出来ました。会員数も当初六、七十名と予定して、現在新会員の急増により、百五十名に達し、尚増加が予想される盛況となり、事務局一同深く感激の念新にしております。

見る、聞く、知る、更に楽しんで、往みよ、郷土づくりに、今年度は町内史跡めぐり、県内史跡見学会、野草観察会、郷土史講座等を開催して、多くの方々の参加を促しました。本年は、一月二十八日の定時総会において承認され、更に中広業計画により、更に中広業分野に亘って活動することとなり、役員一同、総会の要望等と考慮に入れて、会費相互の親睦を図り、ついでに当り、頼みます。進んでの御助力をお願いいたします。(終)



酒々井町の木 梅



### 酒々井 という地名

沖田 善三郎



又香取神社文書(市川市史五巻に「大応寺領、須々井二町五十歩」とあり)之は、応永十四年(一四〇七)に造営料納入の記録である。

印旛郡誌の記事はどの資料を用いたものか不明だが、古くは「醒泉」と称したという。どう読んだものかわからないが、眼の醒めるような清らかな泉という事であろうから、この頃は呼び方に因するが、酒にまつわる語はなかつたように思われる。

次に「ちやうあん」書状の「急ぎ酒の井を尋ね参らせ給へ」とある。「酒の井」が酒々井を指すならば、この頃には酒の井の説話が成立していると考えられる。「ちやうあん」が十稔若胤(常安)ならば、応永三十三年(一四二六)死去であるから、それ以前に事である。

では「醒泉」が何故「酒の井」に転化したのであろうか、恐らく古名「醒泉」は「マメの井」と呼ばれていいたものと思われるが、「マメの井」と「酒の井」或は「孟(酒次)の井」と、酒の字を冠して、又その事酒に因する孝子説話と作る要因にもなつた訳である。

以て例を探してみると、「千葉」地名を「葉」に「安房」に「安房」からして、長狭郡酒々井郷という地名は現在失はれて不明だが、水風(へき)なるいばら「村」に「酒々井(すい)の」の伝説の地があり、そこが旧酒々井の地であろうとしている。その他、酒々井町の近辺の成田市、佐倉市各地には「子は清水」

の伝説地名がある。子が飲めば水の水で、親が飲むと酒となる清水の語であるが、これは本来は「へこわ」清水であつて、強盛な湯水といつたものであろう。

地名はほとんど宛字であるから、本来の地名の起源を表わすものではない。かえて宛字に漢字によつて地名の由来が作り出されてしまつたことがある。

特に水は人のくらしと切り離せないものであり、水源地に對する人々のつ、しが信仰を生み、又多くの説話を全国に生むことになつたものと考えられる。

香取文書では「須々井(すすい)近世に入つてから「志水(しすい)水(しみず)なり」となり、(すい)と音読することによつて変化したものの。

尚地名諸原辞典には「酒々井」は「アイヌ語の「シユス・イレ」(清浄な所)の意で、愛宕山(丹羽)岩倉町「鈴井」と同義な」という説を載せている。(終)

沖田 善三郎さんのこと。  
わが町「すい」の由来を、  
たぐん(古文書)の熱情の論文  
投稿有難うございました。氏は  
俳句の才も高く、現在「朝日」の  
者として活躍されてます。この度  
木更津金銭吟社主催「新春俳句大  
会」において、一月十八日「金銭杯」を  
獲せられた。一月十八日「朝日」に  
紹介され、や、動機がみえ、氏の笑顔を  
紙面に見せ、運ばせながら、ゆ  
いの言葉と今後の活躍を心す  
ゆ祈り申し上げます。(終)

万葉と郷土

歌誌 創作同人 押尾克己

万葉集は我が国最古の歌集で、大伴家持の手になつたと伝えられ、集甲の歌は四千五百十六首、全二十巻、仁徳天皇の代より淳仁天皇の代まで作者は貴賤を、男女を問わず、約四百五十年間の和歌を収めてゐる。そのあまたの中からは、約四百首の歌を捜し出す事はおそろしく気骨の折れる事であるけれども、又それ以上の意義なことを介します。

鳥矢の野に兎狙はり長々も寝なへ兎致に母も嘖げえ

鳥矢の野とは鳥養部の居りし高岡、高崎川下流の鉾木、高崎、この歌はいはゆる東歌で、作者は不明である。上句「鳥矢の野...長々も」は序詞で、意味は、女の家へ忍んで行った差者が運悪く母親に見えられ叱られたという悪戯の歌で、「寝なへ」は寝ない、「嘖げえ」は叱られたという事で、同時代の風俗を知る上で面白い。

天地の何れの神に祈らばか 美し母に又言交けむ (下総国埴生郡 大伴部蘇守佐)

埴生郡とは、旧八生村、現在は房総風土記の女周辺という。この歌は防人(昔の兵士)の歌で、九州防備にあつた。内容は、天地にたくさんある神祇の何の神祇に祈つたならば、防人としての任務を無事に果して、妻愛の母に再びめぐり逢えるらんうかとの母恋しきの歌で、作者は少年かもしれない。防人の歌にはかかる教神思想の歌は多いが、仏教思想の歌のない事は注目すべき事かも知れない。



沙舟の 軸越そ 白波 俄くも 科賜ほか 思念えなくに (印旛郡 大部 直下歳)

この歌も防人の歌である。当の印旛郡とは、佐倉、本佐倉、二本佐倉、酒々井、中川飯田、菖山周辺という。意味は舟の軸先に立つ白波の濤珠を見てみると、急な命に依り防人に行かねばならぬなうたか歌うたかという戸惑いの心を詠んでいる望郷の歌。沙舟、白波は川船に對するけなさいとの意。

以上の歌が何の様な程路を辿り、万葉集編輯部に届いたか、その反面に未収録の歌も相違にあつたはずだと思われ。現在より千四百年も前に当地にも歌人が居たという事は興味ある事である。又同時代より降るが次の歌のある事も書き加える。

伊婆の浦波 たつらしも 舟人ききはき、 から鏡押すなり 古今六帖にある (大江千冬)



押尾克己さんのこと

歌誌創作の社友より、この度印旛郡ではたまたまの同人として活躍中のことは知る人ぞ知る。いつも愛用の麦わら帽子をかぶり、人との出会いを何よりも大切にされる人。新万葉に載りし吾が歌を誦んじて、さう友と居て、歌し、酒の座。お酒がすすり、歌す、目下、播磨にて禁酒との事ながら、信がた事である。楽しんでつては、やうな事にも、又皮肉たつぷりに、歌にての便りなれば、返歌をすま器量持と合わせず、便話にて長々と生の声を送るのみ、現在酒々井町短歌会が元締、俳句会、朝虹に夏げじと意気高しの日々、月。

郷土研俳句

金鈴杯受賞の句 沖田 禾秀

人声へ夕日飛びつく冬木中 翔ぶものなければ樹氷光り合ふ 姿見に四日の空や髪梳ける 木の葉降る翠列の道掃いておく 暖冬や蜜峰ひそと枇杷の花 三石の大注連新衣に初明り 塵ひとつ余さず掃いて年改る 初層祖母と呼ばれる日の近き 宣伝力一過ぎて何もなぬ枯野 悲しみの中に我あり寒椿 冬の夜や茶椀で米とはかりけり おみくじは大吉とてたり初詣 鯉こくの足りて眼鏡のくもりけり 初日の出輝めす雨の元旦かな よりそいて動かぬ鯉や落葉うく 花選び小雨静かに年送る 春の水流れ静かにとまらず 初宵やふみだめらいて立つくす 髪洗ひて夫の番草や初鏡

里余子 邑草子 松崎子 春の坡 松崎子 一月風 松崎子 伊之助 伊之助 秋香 今子 今子

# 七草かゆ 大盛況

新春のおとそ気分もちよつとさめかかった十四日 青年研修所は何かしらけなやろだ笑。声につつまれていた。オメデトウの言葉交し合い、互いに親を下げ合い、コトシモドウゾロシフと逢う人ごとと同じ文句のくりかえすこと三十数回……

広い台所の中はまるで女子学生の如き 着やいだ声……

セリと洗う人。天牛も用意する人。米をとぐ人。皿を洗う人……前もつて決めていたわけてはないが台所仕事は事々ベテラシキがやることは早い。食べること……となると、すべからず勤作もなめらるか？

会場では男従出席者、ストロボの仕度、七草かゆり、会計係をおしつけられて、領收書と石前とお金が合わないとはやいている押尾氏、石渡氏のおわれい

酒々井の若田氏、尾上の綿貫両氏欠席。風邪との由、差し入れの清酒二本に感謝。

尾上の京増忠次郎氏より、七草かゆを作る際に菜とさごみながら唄ったという古歌の紹介。

七草かゆすな、唐工の鳥が、後らぬ先に、なぐな七草、そろえてトニ、日本の土地に、ためしにこの歌、調子をつけてうたいながら菜とさごんでみたが、ソツの間にやら歌の調子は、津軽海、冬景色、時代がちがいの様なもの……と感ぜさせられた。



光孝天皇 厨子を入るの図

文春 2月号より拝借

平安朝の光孝天皇、どのような料理と得意とされたかは不明だが、自分の御室で煮炊きをするので薪の煙が御室にくすぶる「黒戸の宮」とも呼ばれた。そのな。当時の上流階級には、寒中、の差菜摘みという、わば風流ピクニックがあり、摘んだ野草を雑炊にして楽しんだ。といふ。百人一首の「君がため春の野にまで差菜摘む わが衣手に雪は降りつ」という和歌が残っている。

## 七草かゆを食べる会参加記

大きなおなべに三杯、かゆがふつふつと煮えています。あとは餅と七草を入れるばかり。ちよつとした空白の時、思い出されるのは、さき日のおふくろ様のこぼれ……生まれて初めてつくる七草かゆに気もそぞろ、大きなかまを「ドッコイショ」と、おろされたおまんこ、かまのそばでうつら……と居ねかりして、猫ちゃんにザブリ！

その後どんなことになりまして……？ これはしばしば父から聞かされた話だが、私の実家では七草かゆを砂糖で食べる家付娘の母親が、よこ目で見ると「よそから来た人は皆醬油で食べる」と言った。何て考えているから「もちいぢやない」と金杉さん。「お餅は三箇に……」本当にお餅はかまわれないと、被女の青年並のいいことおトソで乾杯。酒がまわる程に座は陽気になり、くづれていく。左近さんの創作舞踊、宇佐見さんの本格歌、鈴木さん本場の上手、「外山節」で「たっけ」又聞かせた下さいね、二次会には、かるた取り、昔の若かりし頃の記憶と呼びましまし、は、一枚又一枚と、札を取る人が集まって来る。押尾さん、石渡さん、古川さん、田村さん、和田さん、細川さん、あまりの盛況に会長氏曰く「来年はかるた取りは別の日にやりましよう」と。

七草を食べて今年いいことなるとありそうなの…… 氣持。

(上岩橋、青柳菜子)

### 短歌

中川 金杉 智恵  
崩れ易き餅につくばい、芽なづな  
萌えし七草、さかしつつ摘む

真白なる かゆにまぜたる七草の  
みどり香にたあ、吹きふきすすする  
植物園鑑片手に七草さかしきて  
相寄り炊きし、かゆぞこのかゆ

### 始末記

私の座にココオニアピラコを見て押尾克己氏の「まわく」のタピラコなんてあやしいもんだ、ニクヤどう見てもタンポポだっペヨ、大丈夫かな、腹痛おこしたらこまっからヨ、オラ食わネ……と、と言えり様幼女子のダダをこねるが如し。二杯目とたいらげたこと知るは筆者のみ。

七草を求めて早春の一日を歩き回る。酒々井はおろか佐倉まで足をのぼし、佐倉野草の会の力を借りて最後の位の座を見つけ、ほっと一息。これほどの思いを炊きこめた七草かゆをすすり、延命・長寿を祈る儀式の楽しき哉。

行事案内

◆ 2月26日(日)

- 午後一時 役場集合
- 雨天の場合は青年座研修所にて研究会
- コース 横町～谷上り～芝山道～大川戸～役場

◆ 3月26日(日)

- 午後一時 国鉄酒々井南口
- 雨天の場合は研修所
- コース 東酒々井～尾上～東園道副～新橋道～七曲



野草観察会

お申し込みはお早めに

三里塚水野葉舟歌碑  
高村老太郎詩碑  
取香牧野馬捕込  
芝山仁王尊  
はらわ博物館  
観音、姫塚古墳  
飯高檀林

。コース  
。午前八時二十分役場集合  
。会費 一、〇〇〇円(当日)  
。教育委員会へ電話申込み  
(九六)  
一七

第四回  
県内史跡見学会(会費募集)  
Aはん 三月十四日(火)  
Bはん 三月十六日(木)  
先着順 35名 締切

会員外の方参加自由です

定時総会 報告

郷土研究会の事業年度は、全則りよつて一月一日から十二月三十一日までとなつております。従つて昭和五十二年度は、十二月末日に終了し、一月二十一日午後一時より、青年研修所において定時総会を開催いたしました。出席者五十名の多数によつて、前会長長挨拶、末寶として、増野一郎氏の挨拶のあと、齊藤一朗氏を議長に選出、五十二年度決算書、事業報告書の承認、五十二年度予算書、事業計画書の承認、議案につき、事務局並びに相承会長の説明、曾根店長の後、原業通り可決されました。議事終了後、懇談会に入り、歓談に移る。懇談会に入り、三十分用会となり、四時

郷土研俳句

鯉こくの足りて眼鏡の  
くもりける はる

外孫に年玉やる  
母の顔 光美

大棒 空にそびえて  
冬の月 知子

しべ深く冬日を裁し  
落椿 一甫

《昭和53年度 事業計画》 決定!

- 古文書研究会  
新規事業。年間12回  
月例により古文書の読解等を勉強する。
- 郷土史講座及び郷土史座談会  
前年度は年間5回であったが本年は10回  
以上実施する(教委共催)
- 野草観察会  
月例により所内外の野草の生態観察
- 家紋調査  
町内の家紋を調査し今後の資料とする
- 石仏調査  
町内にある石仏総点検。新規3年計画
- 史跡見学会 年間4回
- 会報の発行  
年間4回以上を目ざし内容のある会報を
- 史跡めぐり、ハイキング  
年2回町内の史跡を見て歩く(教委共催)
- 運営委員会、総会

新入会員の御紹介

お申込みは (96) 1171へ

53.2.1現在

126	山田	乃	子
127	本田	幸	雄
128	高橋	保	子
129	高橋	竟	三
130	若勝	田	朝
131	青木	内	朝
132	青木	内	朝
133	青木	内	朝
134	青木	内	朝
135	青木	内	朝
136	青木	内	朝
137	青木	内	朝
138	青木	内	朝
139	青木	内	朝
140	青木	内	朝
141	青木	内	朝
142	青木	内	朝
143	青木	内	朝
144	青木	内	朝
145	青木	内	朝
146	青木	内	朝
147	青木	内	朝
148	青木	内	朝
149	青木	内	朝
150	青木	内	朝